

本を選ぶ

NO.419 2020年(令和2年)4月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>情報とリーダーシップ

●大学教員ノート 第3回

●意外と人間的でおもしろい知財の世界

●帰ってきた図書館員(60)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

情報とリーダーシップ

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19 / 2019年に発生したコロナウイルスによる疾患) で国民は制約と緊張を強いられています。先が見えない、何を信用しているのか判らない不安や不信、不満は日本に限ったことではなく世界でも同じです。

こういう時に必要なのが、信頼できる情報と頼れるリーダーです。アメリカの有力紙「ワシントン・ポスト」は毎日、最新情報を発信しています。washington post coronavirus update で検索をすれば同紙の COVID-19 関連のニュース・ページが出ます。そこには「全ての読者にコロナウイルスに関する重要な情報を無料で提供しています」とあり、申込欄にメール・アドレスを記入するだけ毎日更新されたニュースが送られてきます。「コロナ感染に起因する」アメリカ国内での社会問題や大統領発言、更には公衆衛生的な分析等々、日本のニュースにあまり載らないことも多々あります。

これらの社会性の強いニュースの他に、手作りマスク作成の動画とか、「在宅勤務について知りたいこと(日本語を含めた7言語で読めます)」なども載っています。こういう市民目線に立っている記事が多いことも、この新聞は信用できそうだなという気になります。

「ニューズウィーク日本版 (WEB版)」も「新型コロナ」という別枠での特集ページを組んでいます。

掲載されているニュースは米国版の翻訳だけではなく日本独自のものもあります。同誌にはドイツという項目もありメルケル首相の発言が何度となく載っています。世界から称賛され自国でも支持を得たものです。「自由こそが人間の基本ですが、今は自由に動くことが出来ない辛い時期です。あと自粛がどのぐらい続くんだ、という人もいるでしょう。全体を把握するのはとても骨の折れる仕事ですが、過去最大級の支援と援助をします。どうか連邦政府と私を頼って下さい」というものでした。医療専門家のアドバイスをもとに素早い具体策を講じています。国家予算が危機に陥るのではないかと思えるような額での「経済より命」という策も実行しています。

その一つが零細企業者への給料と家賃の肩代わりであり、芸術家への支援です(総額6兆円)。「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ」という文化大臣の発言後、芸術に関わる人が申請したら2日後に60万円を支給するという手厚く素早いものです。芸術関係者への支援はイギリス(216億円)、フランス(第一弾として26億円)、イタリア(緊急対策費として15億円)、アメリカ(83億円)など各国が対策と対応を取ります。日本は現時点では支援表明のみです。

対策と対応で効果を上げているのは台湾、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、ニュージーランド等もそうですが、共通するのは「女性がトップ」であり、信頼できるリーダーとして国民から支持されていることです。男性優位社会を見直さなければいけない点があるのかもしれませんが。(酒井 謙次)

大学教員ノート 第3回

—見のこしたもの—

石川 敬史

卒業研究発表会を終え、今年度担当した授業の成績を提出し、4年生の卒業判定も終わり、数々の入試と判定会議がようやくひと段落したこの時期——新しい年度に担当する授業の内容や構成について、そろそろ考えなければならない、と少しずつ意識し始める時期でもある。

＊

- ・映像や写真を見たりする機会があったので楽しかったです。
- ・先生の説明もプリントも分かりやすく丁寧だった。
- ・授業を受けて図書館の基本的なことが色々分かって印象が変わりました。
- ・たぶん受講した中で一番やる気があった授業でした（笑）
- ・図書館は建物ではない。衝撃でした。

＊

単なる「館（やかた）」ではない図書館の魅力、さまざまな館種、そこで働く司書、基本的人権と社会教育と図書館、図書館法、図書館の自由、まちづくりと図書館、図書館づくり住民運動——司書課程の入門的な科目といえば「図書館概論」であろう。本学では1年生の前期にこの科目が開講され、「図書館」というセカイに初めて出会う学生が集まる。先人が積み重ねてきた「歴史」をできるだけ踏まえながら、「現場」と「現実」をわかりやすく伝えようと、その時々々の図書館に関わる報道、これまでに見学させていただいた図書館内外の写真、司書の具体的な仕事内容など、不器用ではあるが色気を出しつつさまざまな引き出しを駆使する——図書館は変化し続けている。毎年同じ内容で授業はできない。

＊

全15週にわたる授業の最終回、ほとんどの科目で60分程度の期末試験を行うことにしている。その期末試験の終了間際5分ほどの時間を学生からいただいで、極めて個人的な授業アンケートを配布・回収している。本来であれば回答用紙に向き合う極

めて大切な時間であるにもかかわらず、学生からはたくさんのコメントを寄せていただく。本当にありがたいことである——学生へ「ありがとう」の気持ちをきちんと伝えることができず、なんだか心苦しい。

＊

- ・授業の終わりがギリギリだった。
- ・時間配分がおかしくなる時があった。
- ・難しい専門的な部分には、簡単な説明がもう少し加えてくれると助かります。
- ・眠くなりそうで、ならない。
- ・課題提出とテストがあったので、どちらか一つにしてください。

＊

授業アンケートには、汗をかきながら話す者に対して実的確なコメントも提出される。授業の方法やある事柄の解釈など、舞台に立つ教員の言動がすべて正しいとは限らない。ときには前日のアルコールの量が多かったせいか体調がすぐれなかったこともあった。ときには学務に追われてしまい日付を変えることなく昨年の資料を配布したこともあった。ときには話が脱線しすぎて中途半端な内容で授業が終わったこともあった。ときには映写する写真データを忘れたこともあった。ときには板書するときに漢字が思い出せないこともあった。ときには授業開始時間を間違えたこともあった。ときには期末試験のため教室へ向かう途中に問題用紙を研究室に忘れたこともあった——お恥ずかしい限りであるが、今もなお、授業前と授業中は緊張する。

＊

本科目は1年生を対象とし、司書課程における基盤となる科目です。5限に設定されていることから、受講学生の疲労度が極めて高く、授業内容の改善を毎年積み重ねてきました。本年は講義が中心となってしまったため、もう少し演習・グループワークを取り入れるべきだったと考えています。…（略）…

＊

学生の授業評価に対する教員のフィードバック

である——いや、大学に提出した教員の表面的な反省文である。実はまだまだ反省しなければならないことがある。その一つは、近年の記憶力の低下と授業のマンネリ化の影響からか、学生の顔と名前を一致させることが難しくなってきたことである。襟を正さなければならない。単位くださいと毎回授業後に口癖のように語りかけるA学科のBさん、いつも最前列に座るものの自主的に睡眠学習を行うC学科のDさん、とある大学の司書課程教員のご親戚であったE学科のFさん、授業中にコソコソしながら分かりやすくおにぎりを食べるG学科のHさん、授業で「私ばかり指名しないでください」と指摘してくれたI学科のJさん、コメントペーパーの「評点」欄に独自のキャラクターを描き続けたK学科のLさん、チャイム通り授業を終えてほしいと指摘し続けてくれたM学科のNさん、グループワークは疲れましたと教えてくれたO学科のPさん——名前と顔を覚えると、実にたくさんの学生との出会いがある。

*

授業時の講義内容の理解とともに、場合によって受講者同士の議論やミニワークショップを行ない、他の受講生の意見や考えを踏まえ、自らの意見や考えをまとめること。

- ・図書館の基本的機能と役割、館種等、図書館という仕組みを理解する。
- ・図書館が置かれている社会的背景を理解する。
- ・司書の具体的な仕事内容とその役割を理解する。
- ・「図書館の未来像」について自分なりの考えをまとめることができる。

*

偉そうな文章である。この文章は、とある年度のシラバスに掲載した「図書館概論」の学修目標・到達目標の抜粋である。全15回という授業の道に入り、学生の姿勢と表情をみながら、少しずつ対話を重ね前へ進んでいく。その時々、学生の関心、教室全体の雰囲気、受講生の人数、学生が座る位置、所属する学科、学生の個性——もちろん、当初から考えていた授業計画とは異なる方向性へと進む場合もある。授業では、単なる知識を伝えるのではなく、自ら考え表現するとともに、

さまざまな考えがあることを受講生とともに発見できるような授業展開を意識している——毎年、図書館好きで個性豊かな学生が受講するから。

*

…(略)…彼は、授業が始まると同時にうつ伏せに倒れ、眠ってしまった。学生たちが居眠りをしないよう、教室の空気を読みながらあれやこれやと工夫を続ける教授の努力もむなしく、深い眠りに入ってしまった。授業の途中、幾度か学生たちの笑うシーンがあったが、それにもほとんど反応せず、ひたすら眠っていた。…(略)…彼にもまったく同様に授業評価シートが配られたが、記入された回答は「よくわからなかった」「知的刺激を受けなかった」というものだった。

…(略)…

*

かつて、心理学者・溝上慎一が『現代大学生論』(NHK出版/2004)の冒頭で描いた授業の一コマは今でも忘れることはできない。そう、教室の中で「授業」が行われているのではなく、教室に入る前から「授業」が始まっているのだ。確かに多くの学生は表情豊かに前のめりに授業に参加している。温かいコメントを投げかけてくれる学生が多い。ただ忘れてはならないのは、学生の価値観、アルバイト、サークル活動、友人関係、恋愛、趣味、SNSで流れる情報、興味関心——過去と現在と未来の生き方の中に、「今」の授業が位置されていることだ。

*

人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にもいつも大事なものはあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしっかり歩いていくことだ。

*

民俗学者・宮本常一が若き日に大阪へ旅立つ際、父親から言われた事柄を10か条にまとめたことは良く知られている(宮本常一『民俗学の旅』講談社/1993)。学生との対話を重ね続けた後、これらのコトバを司書課程の上級学年が受講する授業の最終回で決まって投げかけることにしている。教壇という舞台で主役をつとめていると、多くのことを見落としてしまう——私自身に対しても常に言い聞かせているコトバでもある。

(いしかわ たかし：十文字学園女子大学)

意外と人間的でおもしろい知財の世界

—『すごいぞ！はたらく知財～14歳からの知的財産入門』—

浅間 麦

ものづくりを支える権利

世間はコロナ騒ぎで大変だ。1年前だったらおんきに花見の計画なんかも立てていた時期なのに、いったい世界はどうなってしまうのだろう。

昨年の今ごろはもっぱら、今回ご紹介する「すごいぞ！はたらく知財」の取材や編集作業に精を出していた。著作権はともかく、商標、特許などの法律とは縁遠い私が本書の担当になったことは、この世に「ものづくりを支える権利」を広める使命を与えられたのだと思うことにしていたので、今回もその使命を果たしたいと思う。

利用と運用

本書は文学、ゲーム、アニメ、映画など、「作品」を作ったり運用したりする11の仕事を取材し、各取材対象者が自分たちの知的財産(知財)をどう守り、活かしているかをまとめた事例集だ。

本書をとおして素人なりに理解したのは、知財とのつきあい方には2種類あるということ。それは「利用すること」と「運用すること」だ。利用は、すでにある作品を二次利用して新しい作品を生み出すこと。運用は、作品から収益を得るために商品化することだ。読者が作り手側なら前者、プロデュースする側なら後者の事例がより興味深く読めるだろう。

個人的にとくに印象に残ったのが後者で、取材した多くの方が、「次の作品を作るための資金をいかに得るか」を非常に重視されていた。ものづくりには時間とお金がかかる。一つの作品を作り上げるまでにかかわった多くの人たちに、できるだけ多くの対価を還元したいという意志を、皆さんから感じた。その業界で働く人や自分たちの文化を守ることと、作品の知的財産権を守るというこ

とは、限りなくイコールなのだ。

フランスの国家予算に示める文化予算の割合は、日本のおよそ10倍だという〔(一社)芸術と創造「諸外国の文化予算に関する調査」(2016年)より〕。くりかえしになるけれど、ものづくりにはお金が必要だ。国からもらえるお金が少ない日本だからこそ、作品から生まれた利益がしかるべき権利者に手渡されなければ、文化の担い手がいなくなってしまう。



「すごいぞ！はたらく知財～14歳からの知的財産入門」内田朋子・萩原理史・田口壮輔・島林秀行 著
監修：桑野雄一郎(高樹町法律事務所)
四六判変型並製／256頁／1500円
+税／晶文社／2019年

権利の主張をこわがらない

そもそも著作権が必要とされるようになったきっかけは、活版印刷技術の発達により、海賊版が世間に出回るようになったことだという。1710年にはイギリスで、世界で初めて著作権保護のための法律が制定され、1886年には国際的な著作権保護条約であるベルヌ条約が結ばれた。音楽著作権管理団体にかんしても、1851年にフランスで設立されている。こうした歴史はすべて、著作権者や版元など、作品の創作に貢

献のあった人たちが、自分たちの権利を主張しなければ生まれなかったものだ。

ベルヌ条約の発案者であるフランス人作家のヴィクトル・ユーゴーは、「書籍は書籍として著作者に帰属します。しかし、思考としては人類に帰属します。あらゆる知性はそこに権利があります」という発言を残している。

音楽著作権管理団体の設立にかかわった3人の音楽家は、カフェで自分たちの音楽が無断で演奏されているのを不快に思い、店にたいして飲食代金の支払いを拒否したという。

情報伝達の手段が変わっていくにつれ、知的財産権のあり方も見直されてきたが、どの転換点でもきっかけとなったのは、権利を主張する人々の

声だ。生まれたばかりの伝達手段では、きまりやしきみが整っていないことも多い。どこかの誰かが、自分の利益を主張するなんて「恥ずかしい」「嫌われる」と躊躇している訴えは、歴史の中でみると、必然の主張なのかもしれない。

なぜ広がらない？ 知財教育

それにしても、世間は人の手が作り出したもので成り立っているのだから、この世のほぼすべての人は知財にかかわりながら生活している。にもかかわらず、自分事として著作権や特許や商標について考える人はどれだけいるだろうか。

ものづくり教育に特化した美術大学などでも、まだ十分な知財教育が行われていないのが現状だという。コピーやパクリ問題のニュースが増えていることもこれと無関係ではない。ものづくりのノウハウを身につけても、作品やアイデアの価値に鈍感なようでは、片手落ちだ。

ものづくりにはドラマがある。一つの作品や発明の影には、たくさんの挑戦と失敗がある。そうした努力にたいする想像力を養いましょう、そして敬意を払いましょう。かたくるしく見える法律の背景には、こうした人間らしい体温があるのだということを、取材をとおして知った。

知財を学ぶことは、インターネット時代のリテラシー、「顔の見えない他者への敬意」を身につけることにもつながる。これからのAI時代、創造性を伸ばすことと同時に、ますます大切な教育分野になることは間違いない。

知財は全教科対応の万能コンテンツ

とはいえ、子どものころから権利や法律などやこしいことを教えてしまうと、ウンザリされてしまうことは容易に想像できる。きまりを学ぶ前に大切なのは、創作の喜びを知り、作者への想像力を養うことだろう。

学校教育では、国語や美術、技術家庭など、創作にかかわる教科がたくさんある。プログラミングや発明品も含めれば、理数系教科だって連想さ

れる。授業の中やその延長線上で作り手や発明家の苦労に思いをはせること、作品を守るしきみについて教えることは、そんなに難しくないはずだ。目の前の勉強がさまざまな職業に結びついていることも実感できる有意義なコンテンツだろう。

意外と人間的でおもしろい知財の世界

今回の本は以下の11の業界に的をしばって取材した。さまざまな業界で活躍されるプロの方々のお話を聞くのはもちろん楽しく、取材時は「へー」「ほー」「そうなんだ！」の連続であった。世の憧れの仕事のリアルを伺い知ることができるという意味でも本書の内容は貴重だ。法律について話を聞いているのについ深い話になってしまいがちなのは、知財をうみだす創作活動が人間の尊厳に深くかかわっているせいかもしれない。

趣味で創作を続けたい人にも、創作を仕事にしたい人にも、その予備軍である中高生にも、そして彼らを見守る大人の方々にもぜひふれてほしい、意外と人間的でおもしろい知財の世界だ。

(あさま むぎ：晶文社)

【本書に登場するの方々】

- 1 文 学 谷川俊太郎
 - 2 音 楽 ユニバーサルミュージック
 - 3 映 画 東宝 (『シン・ゴジラ』)
 - 4 舞 台 草刈民代 (パレエ)
 - 5 テレビ TBS テレビ (『半沢直樹』)
 - 6 芸 能 サンミュージックプロダクション
 - 7 キャラクター
熊本県庁くまモングループ (くまモン)
 - 8 アニメ サンライズ (機動戦士ガンダム)
 - 9 ゲーム
コナミホールディングス (実況パワフルプロ野球)
 - 10 伝統工芸 細尾 (西陣織)
 - 11 アート 東京国立近代美術館
- + α JASRAC / お笑いタレント ゴー☆ジャス
/ フレグランスアドバイザー MAHO

帰ってきた図書館員 (60)

—老人ケアに紙芝居—

山下 青葉

父が入居していた有料老人ホームで紙芝居の読み聞かせボランティアを始めてから9年目になった。高齢者の方々が対象ということで、演目は昔話に絞り、月に一回、時間にして30分ほど3点の紙芝居を読んで（正確には演じるということになるのかもしれないが）きた。

当初は一人でやっていたのだが、途中から同じ施設内で音楽療法を担当しておられたボランティアの方が参加して下さるようになり、形式も紙芝居とお歌のコラボレーションということになって、その方のお人柄がとても良く、声がまたとても綺麗だったので（父の見舞いに来ていた母がたまたまその時間居合わせて、「鈴を振るような声」と感嘆していた）入居者の方々にとってもとても良い時間だったと思うが、私も毎回とても楽しみにしていた。

2013年に群馬県の伊香保で開催された「全国紙芝居まつり群馬大会」に参加して、その直前にたまたま、雲母書房から出版されていた「はじめてみよう老人ケアに紙芝居」というシリーズを知る機会があり、会場でそのシリーズの作品をいくつか手掛けていた介護福祉士の方にお会いできたという、なかなか出来事もあり、ぜひそのシリーズを読み聞かせたいと希望した。

実現にはしばらく時間はかかってしまったのだが、希望通りそのシリーズの作品を連続して読み聞かせで取り上げることになり、参加型の演目では入居者の方々に分担して効果音を出してもらうなど、それこそケアに効果的な使い方をすることができ、いろいろな意味でよかったということになった。

高齢者の方々が世代的にかつて親しんでおられたであろう作品を何点か取り上げた中で、『愛染かつら』を読んだ時に、作中で主人公がイタリアの作曲家ドリゴのセレナーデを歌うという場面があり、本来なら「歌った」で終わるところを、セミプロの音楽の先生がついている「紙芝居とお歌」の時間であるからして、しっかりその場面を歌っていただくことができ、一同その美しい歌声にうっとりということがあり、印象的な出来事として忘

れられない思い出である。

という話をするのは、一昨年末にその音楽の先生がくも膜下出血で急死してしまい、それこそ余人をもって代えがたい方だったため、現場は大混乱、施設自体の事情もあって、私の読み聞かせも休止となり、先ほど今年で9年目と書いたものの、実際はほぼ1年ボランティアはしていなかったのだった。

年が明けて、やっと後任の音楽療法の先生が決まると連絡が入り、ようやく私も復帰ということになり、その時は先生のご都合で一緒することができなかったのだが、約一年ぶりに読み聞かせに行ってきた。

施設のスタッフの方々はほとんど変わっておらず担当の方も続投しておられたのだが、聞いてくださった入居者の方々の顔ぶれが随分と変わっており、高齢の方々であるから、この一年のうちに亡くなれたり、寝たきり状態になってしまわれて、読み聞かせを行っているホールに出て来られなくなったりということがあるのだろうと寂しい気持ちになった。

今回は音楽の先生と一緒して、初回なので『浦島太郎』や『一寸法師』などの歌のある演目を選んで、オペラを歌われるというその先生にオペラ調でそれらの歌を歌ってもらったら面白いのではないかと担当の職員の方と相談していたところ、コロナウイルスの騒動が持ち上がり、またまた別の意味でボランティア活動休止ということになってしまった。

この原稿を書いている4月上旬の段階で、感染の拡大は収まっておらず、私の職場もとりあえず開館はしているものの、一部業務休止状態になっており、年度始めの混乱も重なり、大変なことになっている。

学校も新学期を迎えられず、オリンピックも延期となってしまう、先が見えず、いろいろな意味で不安しかないという感じで、一日も早く感染症騒ぎが終息して、また紙芝居とお歌を再開して楽しい時間が持てるようになることを願ってやまないのであった。（やました あおば：図書館員）



■誰も恐れていた深刻な事態となりました。現状は、なるほど当初から感染症学者が予測していた悪い方の経過をたどっているようで、当分収まるような気配は感じられません。次第に身近に迫る実体の見えない脅威に、おのずと恐怖と不安が募ります。

■アルベール・カミュの『ペスト』が100万部を突破したそうです。十代の最後の年に読んだ記憶がありますが、正直に言えば内容はうろ覚えで、当時は恐ろしい疫病の蔓延について実感があろうはずもなく、物語の設定としか感じていなかったのだと思います。妙に記憶に残るのは累々と現れる鼠の死骸、そして鼠径部（そけいぶ）という言葉と漢字です。

■分子生物学者の福岡伸一氏によれば、ウイルスというのは、ひとつの見方から言えば生命体ではない、と言える。しかし別の見方而言えば、生命体としてとらえられるという。こんな得体の知れない存在をやはり不気味に感じますが、一方でウイルスなしで人類が生き延びることは出来ない、つまり共生関係にあると理解しなければならないそうです。ウイルス一般では、一概に「戦う」相手ではないのかも。

■WHO（世界保健機関）は2月11日、新型コロナウイルス感染症を「COVID-19」と命名。また国際ウイルス分類委員会によればSARSの姉妹種としてウイルス名は「SARS-CoV-2」と呼ぶそうです。（お）